

Title	土田眞紀著 『さまよえる工藝 柳宗悦と近代』 草風館 2007年
Author(s)	清水, 愛子
Citation	デザイン理論. 2008, 52, p. 140-141
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/53566">https://doi.org/10.18910/53566</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

土田眞紀著

『さまよえる工藝——柳宗悦と近代』

草風館 2007年

清水愛子／京都精華大学非常勤講師

本書は、日本の近代に誕生した「工藝」という領域の歴史を、より広い視点から捉え明らかにした書である。「工藝とはどのようなものなのか」、その出発点から自己のあり方を巡ってさまよいつけてきた「工藝」の軌跡が、様々な事例を通じて明らかにされているのである。その中でも、柳宗悦の思想とそこから展開した民藝運動を、近代における工藝のあり方を探る活動の一つとして捉え、その思想の背景や活動の意義を同時代の動向と照らし合わせながら論じている点は、本書の大きな特徴であるといえる。また、「工藝」にまつわる問題は、その範疇にとどまらず日本の近代という時代の問題としても重要視されるなど、これまでにはない視点が各所でみられる。

以上のような新しい視点で近代の工藝を論じた本書は、土田眞紀氏によって記されたものである。本章の内容は、最初から体系的に書かれた訳はなく、1995年以降から10年余りの間に執筆された文章18編から成り立っている。その大半が、著者が美術館の学芸員として、展覧会の企画を行い、収蔵作品に触れる日々のなかで浮かび上がってきたことを題材にしたものだという。その為か現在の工藝が抱える問題に通じる内容が多く、今後の工藝を考えていく上でも重要なヒントがみられる。

本書では基盤となる18編の内容をもとに、3つの章によって構成されている。

1章 明治・大正の図案工藝——図案の「藝術化」をめぐる

2章 変容する近代工藝一九一〇年代から一九三〇年代へ

3章 柳宗悦と「工藝」の思想

まず第1章では、明治期に工藝製作に導入された図案を題材としている。図案は1900年のパリ万博前後に工藝品の意匠面を改革する重要な切り札として注目を集めた。その後、図案は工藝の世界でどのように認識され位置づけられていくのか、陶芸家板谷波山、建築家武田五一、図案家神坂雪佳、陶芸家富本憲吉等の活動を通じて詳細に描き出されている。これらの事例から図案に対する認識や取り組み、直面した問題がそれぞれ異っていたことがわかる。そこには単なる立場の違いだけではなく、アール・ヌーヴォーに対する理解が深く関係していたのである。図案は、単に工藝品の下絵という領域を越え、近代西洋の芸術を規範とした工藝品製作を導入する重要な役割を担っていたのである。

最終的に、図案そのものは本来帰属するはずの工藝への定着を望まず、そこから自立し、「藝術」化することで自己の位置を確立しようとした、その複雑な足取りについても詳細に分析されている。この自己矛盾ともいえる図案の歩みが、後に「工藝」という領域で生じる問題を先行していたという指摘は非常に興味深い。

次に第2章では、1910年代から1930年代において変わりゆく「工藝」のあり方が詳細に描き出されている。

1910年代の動向として、富本憲吉、バーナード・リーチ、津田清風、藤井達吉、高村豊周等が試みた自己の感覚を制作の拠り所とする「個人主義の工藝」をあげている。当時の工藝を先導した「個人主義の工藝」は、次

第に帝展の美術工芸品部設置運動へと展開し、「美術」としての工芸の位置づけを示すに至った。一方、富本やリーチの影響を受けつつも全く逆の「工芸」の在り方を示したのが柳宗悦である。1920年代に柳は「工芸」を「美術」とは全く別の性質をもつものであり、そこにこそ「工芸」のあるべき姿を見出した。この柳の思想や、独自の「工芸」のあり方を提示した今和次郎を例に挙げ、1920年代の「工芸」をめぐる議論は社会状況をも視野にいたした議論へとより複雑化、多様化していくことを指摘している。1930年代になると従来の工芸が担ってきた要素が、「伝統」や「日本的なるもの」として見出されるようになることを指摘している。それは、単なる伝統回帰ではなく、あくまでも外側の視点から新たに発見し見いだされた内側であり、その「伝統」の捉え方も様々なレベルのものがあったという。以上のように、「工芸」の在り方をめぐる議論は、社会の変化と共により複雑なものになり、一様に捉えることのできない錯綜した状況へと展開してきたことがうかがえる。

第3章では、柳宗悦の民藝という思想もまた、日本の近代社会の中で生れたもう一つの「工芸」のあり方を示したものとして、その意義や問題点を見出している。ひいては、近代の「工芸」という領域にとどまらず近代美術史の中に位置付ける試みや、現代における工芸問題を考える一つの切り札であり、新たな問題提起としても有効であることを指摘している点も本書の特徴的な側面である。

以上の観点から、本章では以下の7つの文節によって柳の思想が論じられている。

読み進めていくと、1章、2章で論じられてきた近代における「工芸」の動向が、柳の「民藝」思想の背景として非常に重要な意味をもつことを改めて認識させられる。加えて、

近代という時代に工芸の価値を「工芸自体」に見出す発想がいかに特殊なものであったのか、さらに当時の「工芸」の在り方をめぐる議論がいかに広い視点を持つものであったのかがうかがえる。

著者が柳の思想に唯一独自性を帯びたものとして捉えたのは、「もの」に対する「眼」であった。柳が発見した「民藝」は、民衆に用いられてきた道具の集合体ではなく、自らにとって「美」を唯一つの基準とする一貫した「眼」で「もの」を見ることで形成された一つの理念であるという。しかし、その独自の「眼」も、特殊なものとして評価するのではなく、柳が生きた時代や自らの体験、日本という国で培われた茶の湯文化など様々な出会いを通じて形成されたものであることを論じている。また本書で詳述されている、「眼」を出発点として創り出した「民藝」を中心に「工芸」のあり方を再構築し、「美術」とは異なるもう一つの価値体系を創造した柳の活動は、日本の近代という時代の中で再検証されるべきものであることを痛感する。

最後に、本書で常に実践されていた、「工芸」を時間軸にそって単線的に捉えるのではなく、いかに錯綜しているのか、その錯綜する様相をより多くの視点から捉える試みは、今後の工芸を語る際に必要となる視点であろう。もはや「工芸」は、近代という時代の社会状況や、西洋近代の芸術の動向を抜きにしては語れないことを、再認識させられる書である。